

2016 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:15~14:15 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きには使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
7. 満点が100点となる配点表示になっていますが、国文学専攻の満点は150点となります。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

日本の道徳教育の伝統的なモデルは、心理学と結びついた徳育にあったといつてよい。それは、社会で認められている一定の価値を受け入れ、社会規範やルールを遵守する個人を作り出す教育であった。

そこで重視されている価値とは、たとえば、中学校の指導要領にあげられているような以下の項目である。すなわち、「礼儀」「感謝」「友情」「男女の平等」「個性の尊重」「自然へのイケイの念」⁽¹⁾「生命の尊さ」「人間の気高さ」「集団での役割と責任の自覚」⁽²⁾「コウトクシンと社会的連帯」「正義と公平(差別の禁止)」「勤労と奉仕の精神」「父母・祖父母への敬愛」「学級や学校の一員としての自覚」「地域社会の一員としての自覚」「日本人としての愛国心」「世界のなかの日本人としての自覚、世界平和と人類の幸福への貢献」である。

しかし、筆者はこれらの項目を見たときには、次のような疑問と印象を抱く。まず、これらの項目がタイケイ的⁽³⁾ではなく列挙的であること、そして、これらの項目がどのような基準と根拠によって選ばれているかが不明なことである。つまり、あまり理論的に練られたものに見えないのである。

さらに注意すべきは、個人が社会に貢献すべきこと、個人が社会に奉仕すべきことが、繰り返し何度も強調されていることである。だがその一方で、個人に対する社会の側からの貢献、すなわち、社会による個人の人権の擁護や自律性の尊重はアンバランスなまでに小さくなってしまっている。つまり、社会は、個人よりも上位の価値を持つ存在者と見なされている。そこには、人間のエゴイズムに対する⁽⁴⁾が表現されており、個人⁽⁴⁾の尊厳という近代社会の原理が軽視されているかのようだ。

さらに、これらの項目は、日本国憲法や国連の人権宣言などともそれほど対応しておらず、前記の徳目は、あまり現代性を感じさせない価値観に支配されているのである。

前記の項目に表現されているような従来の道徳観や道徳教育は、現代においては過剰である。というのも、従来の道徳観は、現代哲学・倫理学において重視されている「正義」⁽⁵⁾と「善」の区別に関してまったく無頓着だからである。おそらく、従来の道

徳観をいまだに推進しようとする人びとは、その区別を知らないであろう。

正義とは、等しいものを等しく扱うという意味での公平性や平等性を意味する。それは、自己と他者を同格の存在として等しく扱うことである。他方、善とは、ある人が価値を認めるものを指す（ここでは、個々人にとっての人生の目的や価値としての「善」と、道徳的価値一般としての「道徳的善」を区別したい。正義は、前者の「善」からは区別されるが、後者の「道徳的善」の一部をなしている）。現代のリベラルな哲学においては、正義は共通に守られるべきであるが、善は各人が自律的に追求すべきものであり、他者から強制されるべきものではないと考えられている。むしろ、自分の善を他者に強制することは、他者の自律性の侵害という悪になってしまうのである。

先の指導要領の項目、「個性の尊重」や「生命の尊厳」「人間の気高さ」のなかには、個人は、他者の危害とならない限り自分の自由を行使できるという「自律性の原則」の理念が含まれている。

自律性の原則には、自分が価値ありとするものを、自分で決定できる権限が含まれている。子どもであっても、発達段階相応に、自律性が尊重されるべきことは変わらない。しかし、先の項目のなかには、「こう生きなさい」「これが礼儀だ」「目上にはこう接しなさい」「恋愛はこうあるべきだ」「自分の住んでいる地域を中心に社会貢献しなさい」といった形で、あるべき人間の姿といった生き方の理想型が示されがちである。これでは、個人で自律的に選び取るべき価値を押し付けていることになり、個人の尊厳に反する。こうした教育によっては、自律性は育たない。

指導要領はそれほど詳細な指示をしていないが、学校で道徳教育がなされる場合には、その教育内容はもつと具体的なものになるであろう。そこに、ある種の価値観を持った教員が、「このように生きることが素晴らしいのだ」「こうした仕事観を持つことが理想だ」「恋愛はこうあるべきだ」「国を愛するべきだ」「これが良い結婚だ」といった自分の個人的な善を強制的に教育した場合、先にあげた指導要領よりもさらに古臭く、独善的なものになる可能性もある。

道徳教育が、唯一のあるべき人生の姿を教えるものだとすれば、それは恐るべきものであり、そのような道徳教育などはない方がよい。なぜなら、ひとつの生きるべき仕方を学校教育で示すということは、人間の生き方に上下の階層をつけることであり、

学校や教師が信じる価値から外れるものは、排除されてしまうからだ。

(7) キュウヘイな道徳を語る人は、しばしば、自分の信じる価値や善が、特定の狭い文脈の中でしか通用しないことが理解できていない。たとえ、それに準じて生きることが自分にとってフィットしていても、他の人にはそうではないことが理解できないでいる。そのような視野の狭い人物は、子どもと自分の価値が異なった場合には、自己の信念を問い直そうとはせずに、その異質性を取り除こうとするだろう。

道徳教育の分野で独善的な価値や善が語られるたびに、人びとは道徳への不信感を高め、若い人にいたっては道徳などまったく不要のだと勘違いしてしまうかもしれない。自分の価値や善を過剰に人に強要する態度は、多様な人びとの集まる価値の多元的な社会では、かえって道徳に反するものとなる。善の多様性を認め、異質な人びとと共存することは、他者への寛容と他者の自律性の承認という現代社会におけるきわめて重大な道徳的価値の実現である。これまでの道徳教育には、こうした異質なものの受容と他者の自律性の尊重が欠けていたのである。

他方において、従来のイメージでいう「道徳的な」人を育てるような教育は、不足である。

道徳的であることが、ある種の良好な人間関係のあり方を指していることには、多くの人が同意するであろう。

先に述べたように、従来の道徳教育のイメージは、徳目の教育であった。徳とは、道徳的に善いといわれる心理的特性や行動傾向を身につけることである。まじめ、誠実、思いやり、やさしさといったものは、主に、その人が直接に関わる身の回りの人びとへの態度や心理状態を指している。これらの態度が、一般的にいつて、道徳的に善いものである可能性を、私は否定しない。しかし、こうした身の回りの人びとへの配慮に富んだ「好人物」が悪しきことに加担しているということは、おおいにありうるのだ。

たとえば、近年の日本では、官公庁や大企業の組織的な不正がマスコミをにぎわせている。個人としては些細な窃盗すら犯さない人たちが、組織的な行動では大きな不正に加担し、個人の犯罪のレベルではありえないような数の人びとに危害を与え、ときに人の命さえ奪ってしまう。

国家が犯す過ちは、それが暴力装置を伴っているために、被害はさらに大きくなる可能性がある。侵略戦争や国家による民族虐殺、差別や排除がその例である。だが、そうした集団的な悪に加担してしまった人びとの多くも、しつけやその社会での常識に欠けた人物ではなかったのではないだろうか。彼・彼女らのほとんどは、自分の帰属する集団内ではまじめであり、誠実であり、ある範囲において思いやりのある人びとであったのではないか。

しかし、彼・彼女らの示す普段のまじめさや誠実さ、やさしさは、集団行動としての邪悪をソウサイできない⁽⁸⁾。どのような凶悪な犯罪者も、自分の仲間には親切かもしれないからだ。自分の身の回りの人びとへの配慮、あるいは、自分の帰属集団への貢献⁽⁹⁾だけでは、道徳的に不足なのである。

徳性とは、概して、狭い範囲での行動に関して問われるものである。しかし、私たちの行動は大きく広い範囲の他者に関係しており、自分の行動が見知らぬ他者にどのような影響をもたらしているのかについての認識が、道徳的に不可欠である。グローバル化する現代社会ではなおさらである。

先に見た道徳教育の徳目では、個人が社会に貢献することが強調され、社会が個人に対して為すべきことについてはほとんど触れられていない。こうした教育指導では、どうしても、自分の帰属集団への忠誠心ばかりを養うことになる。そこから、「組織あつての個人」「帰属する社会のためにこそ、個人が存在する」という全体主義的な価値観が植えつけられても不思議ではない。その場合には、その社会の外にいる人びとの利益はすっかり忘却され、先に述べたような異質な人びとへの非道徳的振る舞いを生じさせるであろう。

これまでの道徳教育に決定的に欠けているものとは何か。それは、政治性である。⁽¹⁰⁾を決め込む無政治的な態度を乗り越えようとする努力である。現代は、無政治的な態度が横行しているのではないだろうか。投票率の低さや弱年層の無関心、一貫性のないマスコミ報道など危惧すべき現象が目につく。また、何人かの社会学者たちは、現代の日本における心理主義化の傾向を指摘している。

心理主義からは、社会の問題が、社会構造や経済、政治に起因する可能性がすっかり排除される。心理主義化された人間は、

つねに自分の内面と自分の行動に注意を集中することになり、政治や社会制度や経済の諸問題が視野に入らなくなってしまう。そして、社会を運営している権力を持った人びとを批判することなく、弱い人びとの問題行動ばかりを攻撃するようになる。

徳育が道徳教育として問題なのは、それが心理主義的だからである。心理主義的な道徳観は、道徳的問題をすべて個人の心情に還元する。そこでは、社会のなかの道徳的問題は、個々人の振る舞いの問題へと矮小化^{わいしょう}され、その責任も個人化する。

心理主義的な従来の徳育では、大きな社会的不正を問題視するような公共性を育てることはできず、むしろ、政治的行動を妨げる思考傾向を子どもに植え込んでしまいかねない。道徳的に善き社会を構築し、それを維持・発展させていこうとする政治的主体、すなわち、主権者を育成することが求められるのである。

(河野哲也『道徳を問いなおす』による)

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(7)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 空欄(4)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 隠微なまでの抑止力
- B 幼稚なまでの支配欲
- C 臆病なまでの恐怖心
- D 奇妙なまでの違和感
- E 過剰なまでの単純化

〔問三〕 傍線(5)「正義」と「善」の区別」の説明としてもっとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 「正義」は社会がその内実を決めるものであり、「善」は個人が決める人生の価値である。
- B 「正義」は誰が見ても善いと云える価値であり、「善」は個人によって異なる価値である。
- C 「正義」は社会が主張していくべき価値であり、「善」は個人が自由に創造する価値である。
- D 「正義」は誰もが実現することが可能な価値であり、「善」は個人で実現する価値である。
- E 「正義」は社会によって守られる価値であり、「善」は個人がそれぞれ守るべき価値である。

〔問四〕 傍線(6)「自分の個人的な善を強制的に教育した場合、先にあげた指導要領よりもさらに古臭く、独善的なものになる可能性もある」とあるが、そのような可能性を持つ考えの具体例として適當でないものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 女性は結婚したら、仕事を辞めるべきだという考え
- B ふるさとを大切にし、そこに住むべきだという考え
- C 高い理想を持って、それを追い求めるべきだという考え
- D 不平等な規則でも規則である以上、守るべきだという考え
- E 自分のことより、社会への貢献を優先すべきだという考え

〔問五〕 傍線(9)「徳性とは、概して、狭い範囲での行動に関して問われるものである。」とあるが、この「徳性」をもっとも具体的に述べている箇所を本文中から十五字以上二十字以内で抜き出しなさい。(句読点、かっこ等も一字と数える)

〔問六〕 空欄(10)には「我^{われ}」で始まる慣用句が入る。「我」以下の三字の言葉(漢字を含む)を答えなさい。

〔問七〕

傍線(1)「心理主義的な従来の徳育では、大きな社会的不正を問題視するような公共性を育てることはできず、むしろ、政治的行動を妨げる思考傾向を子どもに植え込んでしまいかねない。」とあるが、そのように言えるのはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 友情や礼儀など、内面をみがくことに力点を置いた道徳教育では、その人の帰属集団を道徳的に善くすることはできても、さらに広い社会に対しての関心を高めることはできないから。
- B 社会の規範を守る気持ちを育むことに力点を置いた道徳教育では、社会が個人を守るようにすべきだという問題意識が育たず、社会の規範を改善しようという発想につながらないから。
- C 人びとを敬愛する気持ちを育てることに力点を置いた道徳教育では、社会の一員としての節度を持った生き方を教えることになるので、帰属している社会を客観視できなくなるから。
- D 世界へ貢献する気持ちを養うことに力点を置いた道徳教育では、個人の関心を自分の内面より社会へ向けることになり、社会も個人の人權を擁護すべきだという考えにつながらないから。
- E 自分の内面を善くしようとすることに力点を置いた道徳教育では、徳目を身につけられないのは個人のせいということになり、社会という要素を考えさせなくしてしまうから。

〔問八〕 次の文ア、ウのうち、筆者の考えに合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 道德教育は、個人が自分の人生における価値や目的を定めるために必要なだけでなく、善の多様性を認め、他人の自律性を尊重する多元的な社会を作っていくためにも必要である。

イ 個人が自分の善を追求する自由は、他人に危害を与えない限り尊重されるべきだという考えは、現代日本の道德教育においては、目標として重視されているとは言えない。

ウ 現代の道德教育は、人間のあるべき姿を示し、それに近づくことを奨励することよりも、異質な人びとと共存できる、道徳的に善い社会の実現を目指す徳性を養うべきである。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

今は昔、誰たとは聞きにくければ書かず。ある殿上人の家に、やむことなき名僧忍びて通ひけるを、男さも知らで過ぎける程に、⁽¹⁾三月の二十日余りの程に、その人、内へ参りにけり。その間に名僧、その家に入り居て、装束を脱ぎてしたり顔にふるまひけるに、女房その脱ぎたる装束を取りて、男の装束ども掛けたる棹さに交へて掛けてけり。しかる間、内より男、人をおこせて、「内より人々ともに出でて遊びに行くことなむあるに、烏帽子えぼうしと狩衣かりぎぬと取りておこせよ」と言ひておこせたりければ、女房、棹に掛けたるなよかなる狩衣を取りて、烏帽子に具して袋に入れておこせてけり。

さて、すでにその遊ぶ所に君達きみたちともに行きけるに、その所に使ひ持ちて行きたれば、開きてこれを見るに、烏帽子はあり。狩衣はなくて、椎鈍しむねの衣をたたみておこせたり。こはいかにとあさましく思おもえて、思ふに(4)さこそはあらめと心得つ。殿上人ども居なみて遊びける所なりければ、異君達こともこれを見けり。はづかしくあさましく思ひけれどもかひなくて、衣をたたみながら袋に入れて返しやるとて、かくなむ書きてやりける。

ときはいかにけふはうづきのひと日かはまだ(6)きもしつる更衣ころもがへかな

と書きてやりて、やがてそのままに家にも行かずして絶えにけり。⁽⁷⁾早う、女房のおろかにて、狩衣を取りて袋に入ると思ひけるに、暗き程にて、掛け交ぜたりければ、さわぎて取りける程に、同じ様になよかなる僧の衣を、取り違へて入れてけるなりけり。妻め、男の文を見て、いかにあさましかりけむ。しかれどもかひなくてやみにたり。

隠すとすれども、このこと世に聞こえて、男をぞ心ばせありいみじかりける人かなと、ほめけるとなむ語り伝へたるとや。

(『今昔物語集』による)

注 内……宮中。

椎鈍の衣……薄墨色の僧衣。

更衣……四月と十月に行う。

〔問一〕 傍線(1)「三月の二十日余りの程」と月日を明示しているのには意味がある。この表現と密接に関わり対をなしている表現を、本文中から十字以上十五字以内で抜き出しなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問二〕 傍線(2)「おこせ」の対義語を本文中から探し、終止形の形で書きなさい。

〔問三〕 傍線(3)(5)(7)の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(3) 「あさましく」

- | | |
|---|------------|
| A | 意外なことだと |
| B | 愚かしいことだと |
| C | さもしいことだと |
| D | みすばらしいことだと |

(5) 「かひなくて」

- | | |
|---|-------------|
| A | うらめしくて |
| B | いくじがなくて |
| C | とるにたりなくて |
| D | どうしようもなくなくて |

(7) 「早う」

- | | |
|---|-------|
| A | 以前から |
| B | なんとまあ |
| C | せっかちで |
| D | 生まれつき |

〔問四〕 傍線(4)「さ」が指している内容を端的に示している箇所を、これより前の本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

(句読点は一字に数えない)

〔問五〕 次のア、イ、オのうち、傍線(6)「まだきもしつる更衣かな」という表現の説明として適当なものに対してはA、不適当なものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 露骨な非難。

イ 冗談めかした皮肉。

ウ 辺りをはばかり罵倒。

エ 間違いに対する真摯な指摘。

オ 他事にかこつけた当てこすり。

〔問六〕 次のア、イ、オのうち、本文の説明として適当なものに対してはA、不適当なものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 語り手は、世間体を気遣って、登場人物の素性を明かさないようにした。

イ この文章の主眼は、殿上人の家で我が物顔に振る舞う名僧の偽善を糾弾することにある。

ウ 殿上人の友達たちは、事情を察して、音楽の遊びで殿上人を慰めようとした。

エ 殿上人は内心、妻からの気の利いた返歌を期待していたが、妻は惑乱して返歌を詠めなかった。

オ 感情を自制して機知に富んだ歌を詠んだ殿上人は、その人柄を世人から賞賛された。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)(20点)

臣聞、求ニ木之長一者必固ニ其根本、欲ニ流之遠一者必浚ニ其泉源、思ニ国之安一者必積ニ其德義。源不レ深而望ニ流之遠一、根不レ固而求ニ木之長一、德不レ厚而思ニ国之治一、雖レ在下愚、知ニ其不可一而況於ニ明哲一乎。人君当ニ神器之重一、居ニ域中之大一、将崇極天之峻、永保無疆之休。不レ念ニ居安思危一、戒奢以レ儉、德不レ処ニ其厚一、情不レ勝ニ其欲一、斯亦伐根以求ニ木茂一、塞源而欲ニ長一者也。凡百元首、承ニ天景命一、莫レ不ニ殷憂一而道著功成而德衰一。有ニ善始一者、实繁能克、終者蓋寡。豈其取レ之易一而守レ之難一乎。昔取レ之而有レ余、今守レ之而不足、何也。夫在ニ殷憂一、必竭レ誠以待レ下、既得志則縱レ情以傲レ物。竭レ誠則吳越為ニ一体一、傲レ物則骨肉為ニ行路一。

(魏徵「論時政疏」による)

注 下愚……とてもおろかな人。ここでは自身を指す。 当神器之重……帝位にあること。 居域中之大……天下に君臨すること。
崇極天之峻……君主として徳義を高めること。 保無疆之休……終わりのない平安を維持すること。
凡百……さまざま。 景命……大いなる天命。 殷憂……深く心配すること。 道著……道徳的に優れていること。
と。 待……対応すること。 吳越……敵対関係の例え。 骨肉……肉親。 行路……通行人。

〔問一〕 傍線(1)「而況於明哲乎。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 賢者の場合でも不可能である。
- B 賢者になることは無理である。
- C 賢者の場合はなおさらである。
- D 賢者のようになれるだろうか。
- E 賢者の場合にはどうだろうか。

〔問二〕 傍線(2)「將崇極天之峻、永保無疆之休」は、「まさにきよくてんのしゆんをたかくし、ながくむきやうのきうをたまたんとす」と読む。これに従って、「保」字の下に付く返り点を書きなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問三〕 空欄(3)に入る漢字としてもっとも適当な一文字を本文中から抜き出して書きなさい。(漢字以外に何も書かないこと)

〔問四〕 傍線(4)「何也」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で書きなさい。(平仮名以外に何も書かないこと)

〔問五〕

本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 君主が国土の保全に努め、山林、河川、道路を適切に維持するのは、統治の基本である。
- B 人間性の高い君主ならば、自分の思い通りに行動しても権力が不安定になることはない。
- C 君主というものは、常に国のことを考える立場なので、心配から解放されることはない。
- D さまざまな君主が、権力を手にした後で、態度や行動をよくない方向に変化させている。
- E 君主が気前のよさを見せると人々は安心するので、国家は安定を維持する方向に向かう。